

- 丸橋珠樹 M1 河合雅雄 垂直分布に基づいたニホンザル自然群の生態学的研究
 森山昭彦 M1 高橋健治 霊長類のタンパク質分解酵素の性状の研究

所内談話会

昭和50年度には、所内談話会は7回開催された。本年度も49年度に引き続き毎月第2、第4水曜に行なわれた。以下に演者とその概要を記す。

第37回 5月28日 竹中 修

「血液の話」

演者は、血液の有する諸機能、1. 酵素、二酸化炭素、熱、情報、栄養物等の輸送、2. 抗体、補体、血液凝固等の生体防御について概説し、次いで現在の研究テーマである霊長類ヘモグロビンの構造と性質、ニホンザル新生児期における血液タンパク質の動態について研究成果を報告した。

第38回 6月10日 杉山 幸丸

「ニホンザルの生涯」

演者は、ニホンザルが一生を通じてたどる行動軌跡を人口学的資料の分析と事例報告を比較しながら、雄、雌それぞれについて紹介した。

第39回 6月25日 庄武 孝義

「生物集団中に潜在する有害遺伝子について」

演者は、生物集団中に潜在する有害遺伝子(遺伝的負荷)の量を、各種の動物で推定した資料を示し、これが生物集団の維持と密接な関係がある事を紹介した。

第40回 7月10日 目片 文夫

海外帰朝報告「大動脈平滑筋における電氣的ひろがり」

演者は、神経末端の直接の支配を受けていない内層の大動脈平滑筋は、どのような方法で神経の命令に反応しているかを調べる為、動脈の外層と内層の間、及び動脈の輪状方向の電氣的連絡を調べ、外層平滑筋の電氣的興奮が、活動電位の伝播によっても電氣的緊張電位の流れによっても内層平滑筋を刺激する事を示した。

第41回 9月17日 田中 二郎

海外帰朝報告

演者は、昭和49年7月18日より昭和50年7月17日までの1カ年間、特別事業費によるアフリカ調査を行なった。

調査は、タンガニア西部のチンパンジー、ボツワナのブッシュマン、ザイール東部のバンブティ・ピグミー、ケニア北部のラクダ遊牧民レンディールを対象に行なわれ、その経過と成果の一端をスライド及び8mm映画を中心に報告した。

第42回 10月29日 大島 清

「サル分娩と周産期の卵管、子宮活動」

演者は、サル分娩の前後に於ての子宮、卵管の活動を筋電図及び内圧の両面から連続的に記録し、自発パターンも、プロスタグランディンに対する反応性も、分娩前、中、後によって著しく異なる事を観察し、分娩現象を境界とした内分泌環境の激変が予測される事を示した。

第43回 11月26日 岡田 守彦

「ヒトとサルの二足歩行」

演者は、サル類とヒトのバイペダリズムの類似と相異及びサル類の間の類似と相異について主として生機構学的側面から紹介し、その適応的意義について考察した。

(文責 林 基治・景山 節)

海外との交流

1) アマゾン上流域における広鼻猿類の調査

西邨顕達・渡辺 毅

出張期間 西邨：50年7月—51年3月

渡辺：50年10月—51年3月

出張先 コロンビア

私たちは、日本モンキーセンター第3次学術調査隊に加わり、調査を行なった。両名とも第2次隊(48年度)からの継続参加である。隊の構成は、代表者が伊沢紘生(日本モンキーセンター)で、私たちの他に水野昭寇(石川県庁・白山自然保護センター)が加わり、現地ではコロンビア国立大の J. Idrobo 教授と、INDERENA の Carlos Cruz 博士が共同研究に参加した。

西邨は前回の調査地と同じ Caquetá 河の支流である Peneya 川に6カ月間滞在し、ウーリーモンキーの生態学的・社会学的調査を行なった。前回の経験から現地での生活と調査に十分なれたこととサル自身が私たちになれたことが相俟ってかなり成果があがった。とくにウーリーモンキーの2つの群れで個体識別がすすんだことから、個体の行動、個体間関係、群間関係等について新しい知見が得られた。

渡辺は前回につづき広鼻猿各種の分布、形態的変異等の調査を目的として、Peneya 川、Caquetá 河本流、Putumayo 河上流を歩き、観察と資料の収集を行なった。資料の詳しい分析はまだ行っていないが、この地域ではこれまでこの種の調査が殆んど行なわれなかったのていくつかの新しい発見が期待される。この他 Peneya 川の調査地では8mm映画の撮影により、広鼻猿のロコモーションの研究を行なった。(西邨顕達)

2) エチオピアにおけるヒヒ類の種間関係、とくに種間雑種についての比較研究。

河合雅雄(代表者)、岩本光雄、庄武孝義、森梅代、

菅原和孝, ラレム・ベルハヌ (Deputy chief Park Warden, Wild Life Conservation Organization, 共同研究者)。

出張期間 50.8.12~51.3.26

出張先: エチオピア, セミエン地方, バレ地方, オモ地方, アワッシュ国立公園,

S. 51 年度科学研究費補助金 (海外学術調査) によって, 表記のテーマでエチオピアで研究を行った。

1. 分布に関する研究 (ラレム, 河合, 岩本, 森): エチオピア南部のバレ地方, オモ地方, アジスアベバ北方のデブラ・リバノス, セミエン地方で, アヌビスヒヒ, マントヒヒ, ゲラダヒヒの分布と, 種間雑種の存在について調査を行った。

2. アヌビスヒヒとマントヒヒの種間雑種に関する研究: 主としてアワッシュ国立公園で行われた。アワッシュ川沿いに生息するハイブリッドのうち, GBグループ (60頭), Kグループ (57頭) の個体識別を行った。また, メタハラにいるマントヒヒの 2バンド (約90頭), アヌビスヒヒ 1群 (71頭) を研究の対象にした。菅原はGB, Kグループの社会学的研究を集中的に行い, 河合は種間関係に重点をおいて雑種形成の社会過程を追求した。岩本は捕獲した82頭に基づいて生体計測, 皮膚腺系の資料を収集。また200体分の骨格を収集し, 形態学的研究を行った。庄武は578頭分の血液を採集し, 遺伝学的研究を行った。

3. ゲラダヒヒの社会学的研究: 森はセミエン地方で, 前回対象としたゲラダヒヒのEハードの個体識別を復元, 前回の継続研究を行った。

3) 特別事業, 霊長類の野外研究

第3年度国外における研究の報告

田中二郎

特別事業費による霊長類の野外研究は, 昭和47年度より発足し, 国外における研究は, 社会研究部門の鈴木晃が, 第1年度, 第2年度と継続して行なったのを, 引き継いで行なわれた。鈴木は主としてウガンダにおいて, チンパンジーをはじめとする各種霊長類の比較生態学的研究を行っており, 第3年度においても, ウガンダでの継続調査が含まれたが, 政治的な理由等により, 実現不可能になった。

第3年度の研究は, 以下の4項目にまとめられる。

(1) タンザニア西部, マハリ山塊に生息する野生チンパンジーの社会生態学的研究。昭和49年の7月-9月。

(2) ボツワナ共和国中央カラハソ動物保護区内に生息する狩猟採集民ブッシュマン族の生態学的研究。10月-12月。ブッシュマンについては, 田中が昭和41年以来, 主たる研究対象としている民族で, 今回は人口学的資料の収集に重点をおいた。

(3) ザール東部, イツリ森林に生息する狩猟採集民ピグミー族の生態学的研究。昭和50年1月-2月。乾燥地のブッシュマンとの比較において, とくに環境と生計活動の關係に焦点をしばって調査した。

(4) ケニア北部の乾燥地帯に住む遊牧諸民族の比較生態学的研究。3月-7月。低地より乾燥し高温なところに住む, レンディーレ, ガブラ, ソマソ等ラクダの遊牧で生活する諸民族, および, やや環境のマイルドな土地で牛の遊牧を行なうサンプル, トゥルカナ諸族との比較生態学。とくに, ラクダとヤギ, ヒツジの飼育のみで生計をたてるレンディーレ族の生態研究に主力を置いた。

4) 古典的条件づけの神経生理学的研究

C. D. Woody

Charles D. Woody (米国, UCLA, Dept. of Physiology, Associate Prof.) は日本学術振興会の招きにより, 神経生理研究部門に昭和50年9月29日より10月29日まで滞在した。Woody氏は過去7年間ネコの瞬目条件づけの神経機構の神経生理学的研究に顕著な業績をあげており, 将来の発展の期待される新進の生理学者である。学習・記憶の神経機構の解明に意欲を持つ神経生理部門のスタッフの希望が実り, サルで条件づけ機構をさぐる具体的な方法を見つける共同研究 (予備的なもの) が始まった。

酒井正樹, 松村道一, 久保田健が参加し, Woodyの開発した方法でサルに瞬目条件づけを行う一方, サルの運動野の細胞より, ガラス電極で神経細胞内より記録を試みた。短期間ではあったが各位の精力的な努力により, 初期の目的を達成し, ほぼ満足すべきデータを得ることができた。

また, アメリカの若手の一流の神経生理学者の研究態度, 考え方など関係者に多くの感銘を与えた。

予備的な協同研究の結果, 今後とも共同研究を行うことで, 大きな成果が期待できるのでそのように努力するつもりである。共同研究に参加した酒井正樹氏は, 共同研究を更に発展させるためWoodyの招待により, 渡米51年6月1日より共同研究をUCLA, Dept. Physiol. でWoodyとの研究を行っている。